報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　An Internal and External Syntax of Noun Phrases in the History of English
（英語史における名詞句内部と外部の統語論）

氏　　名　柳　朋宏

論　文　内　容　の　要　旨

本学位論文は、英語歴史言語学における記述的研究と理論的研究の両側面から、古英語における共時的な名詞句の分布と通時的な変化について分析したものである。記述的研究の側面からは、名詞句の内部構造と節内において名詞句が生起する位置の多様性について論じる。一方理論的研究の側面からは「格による名詞句の認可」に焦点をあて、非構造格（内在格・語彙格）の存在と消失が、それぞれどのような統語的効果をもたらしたのかについて論じる。

第１章では、本論文の目的を示した後、第２章以降の統語分析に必要となる理論的枠組みを提示する。また第４章、第５章の議論において中心的役割を果たす「格フィルター」を始めとした、生成文法における格理論の変遷を概観する。

第２章では、古英語・中英語における数量詞の分布について、現代英語の数量詞との比較を通して論じる。数量詞句（QP）を仮定し、QP 内での数量詞と名詞・代名詞の語順について、名詞は数量詞に先行し、代名詞は数量詞に後続する傾向にあることを計量的に示す。また、現代英語では主語からの遊離は可能であるが、目的語からの遊離は原則不可能である。このような対比は、古・中英語にも当てはまることを示す。

古英語の代名詞はその接語特性から動詞に接語化することが可能であった。これを「長距離接語化」と呼び、定形動詞に接語化する。一方、QP 内でも接語化が観察されている。この場合、代名詞は数量詞句を越えて移動しないので「短距離接語化」と呼ぶ。長距離接語化は、英語の歴史において動詞第２位現象の消失とともに一般的な統語現象からは姿を消すことになるが、短距離接語化は現代英語においても代名詞と数量詞との語順において観察される現象であると主張する。

第３章では古英語における目的語移動を取り上げる。二重目的語構文における間接目的語と直接目的語の語順、副詞と目的語の語順、談話標識と目的語の語順は、それぞれ統語的要因、かき混ぜ、談話的要因によって決定されると提案する。二重目的語構文では「間接目的語−直接目的語」語順が基本語順であり、little v の EPP 素性に

よって直接目的語が vP の指定辞に移動することで「直接目的語-間接目的語」語順が派生される。また、副詞と目的語の語順については、従属節中でも観察されることと目的語の定性が関わっていないことから、Holmberg の一般化には当てはまらないため、目的語推移ではなく、かき混ぜタイプの移動であると論じる。さらに、then, now のような談話標識を超えての目的語移動について、van Kemenade and Los (2006) の分析を援用し、談話標識を越えての目的語移動は談話的要因による移動であると分析する。目的語が談話標識に先行する事例は限られているが、その中に談話標識を挟み、左側に代名詞、右側に数量詞が生起している遊離数量詞の例がある。高見 (2001) と龍 (2004) では遊離数量詞は焦点要素であると論じている。彼らの分析に従えば、談話標識の左側が話題位置、右側が焦点位置という van Kemenade and Los (2006) の分析を支持する証拠となる。

第 4 章では、seem タイプの動詞を含む経験者構文について考察する。古英語の本来語である þyncan 'seem' は与格経験者項を伴うことがあり、その項は動詞に先行することも後続することも可能であった。その後 þyncan が衰退する一方、古ノルド語から借入された semen 'seem' が þyncan の役割を受け継ぐこととなる。semen も借入時は与格経験者項を伴っていたが、次第に前置詞経験者項を伴うようになる。格語尾の消失後、経験者項は前置詞を伴うようになるが、経験者項が代名詞の場合は、動詞に編入することでも認可されたと主張する (Baker (1988))。編入は第 2 章で論じた長距離接語化とは性質の異なる操作である。また、Elmer (1981) の分析を補強・拡張するため、人称による分類を行い、1 人称の経験者項は動詞に先行し、2, 3 人称の経験者項は動詞に後続することを示す。さらに経験者項が動詞に後続する場合、虚辞 it が文頭に現れ、経験者項と虚辞とが相補分布を示すことについても論じる。

第 5 章では、与格名詞を伴う 3 つの構文を取り上げ、与格語尾の消失後どのような変遷を経て、現代英語へと発展したかについて論じる。いずれの構文においても、与格名詞は格語尾の消失によって、構文に関係なく前置詞 to (あるいは till) を伴うようになる。これは構文固有の変化ではなく、当時の英語の文法全体に影響した変化だといえる。その後、経験者構文では前置詞を使用し続けるが、与格動詞構文では前置詞の使用を破棄し、目的格の目的語を直接伴うようになる。古英語の二重目的語構文では 2 種類の語順が観察されていたが、それぞれの語順によって変化が異なり、「間接目的語-直接目的語」語順では前置詞の使用を破棄し、直接目的語を選択するようになる。一方、「直接目的語-間接目的語」語順では前置詞の使用は継続される。このような構文間の発達の違いは、それぞれの動詞の内部構造と格付与能力の違いに起因していると主張する。

第 6 章では全体の議論をまとめ、本論文の分析に関連した更なる争点について述べ、今後の研究課題を示す。